

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01926

研究課題名（和文）中学生の「関係性を生きる力」を回復するプログラム開発のための基礎的研究

研究課題名（英文）A study of the program development for recovering the power to live relationships in middle school students

研究代表者

畠中 宗一（HATANAKA, MUNEKAZU）

関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：10141855

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：関係性を生きる力は、子どものウェルビーイング及びその下位概念（身体面、心理面、社会的場面、自分の未来を創造する力）と正の相関関係にあり、関係性を生きる力の向上が、子どものウェルビーイングの高まりにつながることを示唆された。また子どものウェルビーイングを高めるキー概念となっていた家族の情緒的關係に対する肯定的認識以上に、関係性を生きる力は子どものウェルビーイングに強い影響を示していた。また関係性を生きる力を育むプログラムは、5つの柱で展開された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生産的・課題達成型の価値観を重視する社会では、葛藤を否定的に評価する傾向があり、その結果、葛藤場面に弱い大人や子どもが多発化している。家族問題の多発化は、葛藤への対応力が後退していることを意味する。これまで環境条件の改善に比重が置かれてきたが、その効果は明確ではない。関係性を生きる力は、主体の側に焦点をあて、教育臨床・福祉臨床・家族臨床において、学術的に重要な概念であると同時に、家族問題の多発化に対する問題解決の視点からも社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The power to live relationships have a positive correlation with child well-being and the subordinate concept (physical aspect, psychological aspect, social aspect, and the power to create your own future). It was suggested that improving the power to live relationships leads to an increase in child well-being. The power to live relationships showed a stronger influence than the positive perception of family emotional relationships. The program for the raising the power to live relationships was developed with five pillars.

研究分野：家族臨床福祉学

キーワード：関係性を生きる 子どもウェルビーイング プログラム開発 分節化したプログラム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで子どものウェルビーイング尺度開発や関係性のなかでの自立尺度の開発を行ってきた。これらの尺度を使って子どもや大人の現状を測定してきた。他方で、家族問題の多発化が進行し、必ずしも有効な政策が展開されているわけではない。とりわけ、主体の側への働きかけが十分ではない。現代社会の特徴を、生産的・課題達成型の価値観を重視し、利便性・快適性・効率性を追求する社会として認識すると、**葛藤、個人の成長、共に生きる**というキーワードは、生産的・課題達成型の価値観が重視されると、必ずしも肯定的には評価されない。葛藤することが、生産性にマイナスと評価される。あるいはトラブルの多い職場は、生産性が低いという認識に近い。生産性ということばが支配する世界は、個人の成長とは無縁である。同様に共に生きるという発想も乏しい。したがって、**葛藤、個人の成長、共に生きる**というキーワードは、現代社会の特徴と親和的ではない。「葛藤と折り合う力」あるいは「関係性を生きる力」の後退は、現代社会によってもたらされている。そうであれば、「葛藤と折り合う力」あるいは「関係性を生きる力」を育てるためには、現代社会のあり方を変えなければならないのだろうか。われわれが、一方でより良い生のあり方を志向しつつ、他方で現実の社会のあり方に規定されているという事実性を生きていると認識するならば、一方で「葛藤と折り合う力」あるいは「関係性を生きる力」を志向しながら、他方で現実の社会のあり方に規定されている。そのような生のあり方を具体化することが必要であろう。現代社会の特徴によって後退させた葛藤、個人の成長、共に生きるという諸価値を志向しつつ、現実の社会との折り合いを図っていくしかない。そうでなければ、われわれの存在は、益々機械化やロボット化していくことになる。葛藤、個人の成長、共に生きることは、現代社会に対する細やかな対抗軸でもある。これらの対抗軸を維持することで、われわれは、本来の人間性を維持することができるのではないか。

2. 研究の目的

複雑化した現代社会の中で、子どもの貧困、不登校、虐待、援助交際、家庭内暴力、非行、心身症、自殺、いじめなど子どもと家族をめぐる問題が多発している。このような課題を抱える子どもたちは、気質的な問題を抱えていたり、特異的な環境におかれていたりするなど特別な条件を必ずしも備えている子どもばかりではない。現代社会においては、どの子どもも問題を抱える可能性をもっているといえる。そこで本研究では、「関係性を生きる力」の回復が、今日の社会における子どもや家族をめぐる問題群を解消・解決していくためのキーワードの一つを構成するという仮説を探索する。具体的には「関係性を生きる力」を持つことが、中学生の健全な成長を保障し、健康で安定した生活につながることを実証すると同時に、中学生の「関係性を生きる力」を向上させる具体的なプログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

代表研究者は、日本 IPR 研究会の経験をもとに「関係性を生きる力」を回復

させるためのプログラムとして、IPR トレーニングのエッセンスを取り出し、それらを分節化した形式で展開するプログラムを展開した。なぜ分節化かという、3泊4日のベーシック・トレーニングと2か月後の1泊2日のメイン・トレーニングを外部と遮断された空間で実施することが、現代のニーズとマッチしない。そのための分節化である。

共同研究者は、徳島県教育委員会の協力を得て調査研究を実施し、その解析結果に基づき、家庭教育という文脈のなかでプログラム開発を試みるという方法が取られた。

4．研究成果

代表研究者は、IPR トレーニングのエッセンスを、以下の5つに集約した。すなわち、(1)他者への誠実な関心、(2)見ること、聴くこと、感じること、応答すること、これらを「いま、ここで」実践する、(3)関係性に気づき、関係性を生きる、(4)他者を独自性存在として相互受容する、(5)実存の覚醒。これら5つのエッセンスを分節化すると、以下のステップ1から8を具体的なプログラムとして提案している。すなわち、

ステップ1：他者への誠実な関心を培うためのプログラム、

ステップ2：見て感じ応答するプログラム

ステップ3：聴いて感じ応答するプログラム

ステップ4：見て感じ聴いて感じ応答するプログラム

ステップ5：関係性に気づくプログラム

ステップ6：関係性を生きるプログラム

ステップ7：他者を独自性存在として相互受容するプログラム

ステップ8：実存の覚醒あるいは自分らしさの再発見のためのプログラム

また共同研究者は、調査研究の解析から、「関係性を生きる力」は、「子どものウェルビーイング」及びその下位概念(身体面のウェルビーイング・心理面のウェルビーイング・社会的場面におけるウェルビーイング・自分の未来を創造する力)と正の相関関係にあり、「関係性を生きる力」の向上が、「子どものウェルビーイング」の高まりにつながることを示唆された。また、「子どものウェルビーイング」を高めるキー概念となっていた「家族の情緒的關係に対する肯定的認識」以上に、「関係性を生きる力」は「子どものウェルビーイング」に強い影響を示していた。

さらに調査結果から得た知見に基づく子供向けの家庭教育プログラムを開発した。

すなわち、「生活習慣・家庭生活を営む」、「家族との関係性を生きる」、「前向きに自分らしく生きる」、「ほどよい人間関係を生きる」、「自分の将来や未来の生活を創造する力を育む」の5つを柱に、生活習慣や家庭生活、家庭や社会での人間関係など、社会の中で人と繋がり、自分らしく自立していくために大切な事項について、日常の身近な話題から設定することとした。設定したプログラムのテーマは、次の通りである。

「生活習慣・家庭生活を営む」

○早寝・早起き・朝ごはんで作る生活リズム

- 「ゲーム・テレビ・動画視聴」のルール
- "私って依存している！？
～ケータイ・スマホとの上手な付き合い方～"
- バランスの良い食事ってどんなの？
- 「家族との関係性を生きる」
- 家族の会話～昨日、家族とどんな話をしましたか？
- こんな時、どう関わる？ 家族編 エピソード
- 家庭での役割分担を考える
- 親になるということ
- 「前向きに自分らしく生きる」
- 自分のことを語る～自分の良さ・仲間の良さに気付く
- 自立って何だろう？ 自分の自立度をチェックしよう
- ポジティブな気持ち・ネガティブな気持ち
- 「イライラ」する日常、どんな時？
- 「ほどよい人間関係を生きる」
- 良い聞き手になろう
- こんな時、どう関わる？ 友人・異性編
- こんな時、どう関わる？ 地域社会編 地域の人々と共に生きる
- 「自分の将来や未来の生活を創造する力を育む」
- 未来を夢見る力
- 「働く」ということ
- いのちを考える
- 赤ちゃんとの生活

以上の詳細な記述は、報告書としてまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村直子	4. 巻 35
2. 論文標題 「生きる力」をはぐくむ中高生・次世代を対象とした家庭教育支援プログラムの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 171-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00028955	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 畠中宗一	4. 巻 543
2. 論文標題 共に生きるための人間関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tasc Monthly	6. 最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 畠中宗一	4. 巻 38
2. 論文標題 教育現場と政策のはざまを生きる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族心理学年報	6. 最初と最後の頁 25 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木村直子・畠中宗一	4. 巻 35
2. 論文標題 子どもたちの「関係性を生きる力」尺度に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 276-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00028572	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畠中宗一	4. 巻 25
2. 論文標題 関係性を生きる力を高めるためのプログラム開発：現段階の覚書として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 研究会誌 IPR	6. 最初と最後の頁 13 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 畠中宗一編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 共に生きるための人間関係学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 直子 (KIMURA NAOKO) (80448349)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授 (16102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------